

## ベルサイユ講和会議と朝鮮問題

——パリでの金奎植の活動と日米の対応——

はじめに

一九一四年に勃発した第一次世界大戦は、英仏露の協商側、独墺の同盟側の双方にとって一進一退の展開となり、予想外の長期戦となった。その大戦の帰趨を決したのは、ドイツによる無制限潜水艦戦再開に対抗するため、米国の対独宣戦布告であった（一九一七年四月六日）。そして、米国の参戦が決定的要因ともなつて、一九一八年一月三日にはオーストリア・ハンガリーが、そして同月一日にはドイツが休戦協定に調印し、大戦は終結した。大戦終結前の一九一八年一月、米大統領ウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson) は、「一四か条」の平和原則を提唱し、国際政治における「新外交」

の確立をめざしたが、その中の第五項は、「植民地問題の公平な解決」を唱っていた。それを伝え聞いた被支配諸民族が自分たちの独立をめざす中、ドイツとの講和のための会議が一九一九年一月一八日、パリ郊外のベルサイユ宮殿で開催され、連合国からはウィルソンも含めて首脳級の人たちがパリに赴いた。また、被支配諸民族の独立運動家たちも、会議において働き掛けを行なうために代表をパリに派遣していたが、植民地保有国への抑制役としての米国に対する彼らの期待は概して高かった。

一方、一九一〇年八月に日本の植民地となつていた朝鮮では、朝鮮総督府のもとで「武断統治」とよばれる統治が実施されていたが、それに対する朝鮮人の不満は大きかった。しかし、総督府当局の嚴重な警戒体制のため、

長 田 彰 文

朝鮮人独立運動家の多くは、中国、ロシア、米国などの地で活動を展開した。そして、第一次世界大戦の終結、ベルサイユ講和会議の開催、朝鮮における三・一運動の勃発という状況のもと、朝鮮人代表としてパリにやってきたのが金奎植であった。本稿では、金奎植のバリ行きの経緯、米国講和代表団を中心とした講和会議に対する彼の働き掛け、米国側の対応ぶり、そして会議において「五大国」の一国であった日本との関係などについて論じ、金奎植のバリでの活動が朝鮮独立運動においていかなる意味をもったのか、講和会議において朝鮮問題がいかなる位置を占めたのかなどを考察したい。

#### 一 金奎植のバリ派遣

京畿道楊州郡で出生した呂運亨は、故郷で私塾を開いたりしてきたが、日本の韓国併合後、牧師になるために平壤にある長老教会連合神学校とソウルとを一九一二年から翌年にかけて往復し、二年の課程を終えた。しかし、宣教師たちが往々にして朝鮮総督府に迎合しようとしたことから、彼は、牧師になる道を捨て、一九一四年九月、南京に渡った<sup>(1)</sup>。

呂運亨は、南京では金陵大学英文科に通う一方、孫文、陳独秀らとアジア情勢について語り合ったり、朝鮮在住の宣教師と連絡をとり、同胞学生の渡米斡旋にも尽力した。そして、一九一七年夏に大学を終えた呂運亨は、より大きな政治舞台を求めて上海に移り、米国人フィッチ(George Fitch)経営の協和書店で販売の仕事に従事した。そうしているうちに、ロシアでのボルシェビキの権力掌握、ウィルソンによる「一四か条」提唱、独逸にあって不利な大戦の進展という状況のもと、呂運亨は朝鮮独立の好機がきたと考え、彼の許には、一九一八年に早大を卒業し、同年五月に上海にやってきた張徳秀、金澈、趙素昂(東祐)、鮮干赫、韓鎮教らの若者が集まった<sup>(2)</sup>。

呂運亨は、張徳秀らとの討議の後、彼らとともに一九一八年八月二〇日、新韓青年党を結成した<sup>(3)</sup>。本部を上海とした新韓青年党は、①民族主義、②民主主義、③共和主義、④社会改革主義、⑤国際平和主義などに立脚して、朝鮮の独立を回復することを目的としていた。党員数は、初めは呂運亨および前述の五人の六人であったが、同年一月には金奎植、李光洙、孫貞道などの入党で二〇人あまりとなり、同党は庶務部、交際部、財務部などをも

ち、呂運亨は、交際部理事となった。<sup>(4)</sup>そして、呂運亨は同年九月、平安北道宣川で開催の長老教總會に秘かに参席し、朝鮮長老教の中心的人物である李昇薫と会って、国内・国際情勢を論議し、ソウルにも行って同志たちとも会い、九月末、上海に戻った。<sup>(5)</sup>

そのような状況のもと、第一次世界大戦が一九一八年一月一日に終結した。それをうけて、ウィルソンは、きたる講和会議への中国の参加を促すため、アジア通の友人クレイン (Charles R. Crane) を特使として中国に派遣した。クレインは日本、朝鮮を経て、中国入りし、中国では北京を経て、一月二六日、上海に到着した。<sup>(7)</sup>

クレインは一月二八日の朝、約八〇〇人が参席する中で感謝祭を記念して演説を行なったが、彼は、中国ができるだけ多くの主権回復のためには講和会議に参加するのが望ましいと主張し、大拍手をうけた。<sup>(8)</sup>呂運亨も参席したが、彼はクレインの演説を聞いたのち、友人の中国外交官王正廷 (のち、講和会議の中国代表団の一員) にクレインを紹介してもらい、クレインと会見し、自分は朝鮮人であること、日本の韓国併合以来、日本人の朝鮮人に対する抑圧は日毎にひどくなっていることなどを説

明し、この機会に朝鮮も代表をバりに派遣したいので協力をお願いしたいと要請した。これに対して、クレインは、力の限り積極的に援助すると約束した。<sup>(9)</sup>

これをうけて、呂運亨は張徳秀らに事情を説明し、金奎植を朝鮮代表に選出した。金奎植は、米国バージニア州のロアノク大学出身で英語に通じており、一九一三年には中国に亡命し、華北、蒙古、張家口などにいたのち、一九一八年のこの時期には天津にいた。<sup>(10)</sup>

こうして、金奎植がバりに行くことにはなったが、その前に解決しておかなければならなかったのが、資金問題および金奎植がバりに行く船便の問題であった。資金問題については、張徳秀が釜山に赴き、日本円二〇〇〇円を用意してきたこと、金奎植の妻金順愛が調達することなどから、解決のめどがついた。<sup>(11)</sup>一方、船便の問題は、フランス行きの船便が一九一九年三月末まで予約がいっぱいで乗船券が入手できないことから起こったが、呂運亨が中国講和代表団の一員としてバりに行く予定だった旧知の鄭毓秀女史に乗船券を譲ってもらい、解決に至った。少々時間はかかったものの、金奎植は一九一九年二月一日、上海を出発し、海路インド洋を経て、同年三月

一三日、パリに到着することになる。<sup>(12)</sup>そして、朝鮮では、日本の統治に対する不満から、旧韓国皇帝高宗の葬儀を契機にソウルで三・一運動がすでに勃発していた。

新韓青年党は、以上のようにして金奎植のパリへの派遣に成功したが、その一方で、党員のうち張徳秀、鮮干赫、金澈、金順愛などを朝鮮本国内に潜入させ、国内指導層との接触および彼らへの独立運動展開の慫慂、資金調達などに当たらせた。また、同党は、まず趙鏞殷、次に(朝鮮から)張徳秀、そして李光洙を順々に日本に潜入させ、在日朝鮮人学生との接触などに当たらせ、呂運亨を満州および露領沿海州に潜入させ、在露・在満朝鮮人との接触、資金調達に当たらせた。こうして、新韓青年党の活動は、三・一運動の「震源」をなしたのであった。<sup>(13)</sup>

## 二 講和会議と「人種平等案」

ウィルソンは、「一四か条」の第一四項で「大国のみならず小国にも政治的独立および領土保全の相互的保証を付与するため、諸国家の一般的団体が組織されねばならない」と提唱していたが、彼は、新しい国際政治秩序

確立のために自分の提唱に基づいた国際連盟(The League of Nations)の設立をベルサイユ講和会議において最重要視した。<sup>(14)</sup>しかし、講和会議は、依然止まぬカリフォルニア州での日系人に対する排斥運動を念頭において日本が主張した「人種平等案」の国際連盟規約への挿入問題、また一九一四年の日独戦争で日本が押えた山東省でのドイツの各種権益の日本への移転問題をめぐって紛糾した。

連盟規約への「人種平等案」挿入という考えは、連盟の成立・加盟の際に白人国家の主導、有色人種への偏見が連盟の場にもちこまれることで日本が不利益を被るとの恐れから一九一八年一月一九日に臨時外交調査委員会で決定をみた。それをうけて、日本講和代表団次席全權牧野伸顕は、一九一九年一月から二月にかけてウィルソン、國務長官ランシング(Robert Lansing)、ウィルソンの顧問ハウス大佐(E. M. House)に交渉したが、二月五日にウィルソンがハウスと協議した上で自ら日本案に修正を加えたりしたもの、の彼らの反応は好意的であった。しかし、多くの自治領、植民地をもつ英国は牧野との内交渉の際に反対の意を示し、二月一三日の連

盟委員会に牧野が提案した際も中国、ブラジル、ルーマニア、チェコ・スロバキアの各委員は賛成したが、英、仏、ベルギー、ギリシアの各委員は反対した。この問題の鍵は白豪主義の立場から強硬に反対しているオーストラリアにあると考えた牧野は三月一日、豪首相ヒューズ (William Hughes) と会談したが、ヒューズの姿勢は硬かった。そして、三月中に交渉したものの進展をみない中、牧野は四月一日、「人種平等案」の(連盟規約本文へではなく)前文への挿入を連盟委員会において提案したが、英、ポーランドは反対したものの、仏、伊、中国、ギリシアは賛成した。これをうけて採択が行なわれ、出席者一六人中一人が賛成したが、会議の議長ウィルソンは、このような重要な問題は全会一致でなければならぬと否決し、それに対して、牧野は留保する旨述べた。しかし、結局、日本の主張は容れられなかった。<sup>(15)</sup>

また、山東省でのドイツ権益問題に関しても、牧野ら日本側講和委員は、日本への移転を繰返し強く主張した。講和会議における空気は中国に同情的だったが、連盟規約への調印拒否をも示唆した日本の態度を前にして、山東省でのドイツ権益は、この時点でそれらを手にしてい

る日本への移転が四月三〇日の最高会議で決定した。「人種平等案」に関して日本が譲歩する代償として山東省でのドイツ権益を日本が継承したとも囁かれたが、一九一七年八月の対独宣戦で自らも「戦勝国」となっていた中国からすればこうした事態は到底容認できるものではなく、中国では五月四日、パリにおける決定に対する不満から「五・四運動」が起こり、中国代表は結局、ベルサイユ条約には調印しなかった。<sup>(16)</sup>

ただ、日本が植民地にしていた朝鮮で三・一運動が起こったにもかかわらず日本が講和会議で「人種平等案」をもち出したことには、講和会議の米国代表団は冷たい視線を向けていたし、<sup>(17)</sup> 米国本国では、三・一運動を弾圧している日本が自由な移民の権利のために「人種平等案」などをもち出すこと自体問題にもならないとの報道もあつた。<sup>(18)</sup> また、中国代表団の顧問としてパリに來ていた上海在住の米国人ジャーナリストのミラード (Thomas F. Millard) も、中国人などは日本への移民が厳しく制限されていること、朝鮮・台湾では地元民よりも日本人が優遇されていること、日本が主張する「人種平等」とは日本人の優遇を求めたものにほかならず、

ほかのアジア人は最初から除外されていることなどを挙げて、日本の態度を厳しく批判した<sup>(19)</sup>。

以上のような状況にあったパリをめざして、金奎植は、旅路を急いだ。

### 三 パリでの金奎植の活動と講和会議

金奎植が上海を発ったのは二月一日だったが、駐上海日本領事館がその情報をつかみ、本国に報告したのは、一か月以上後のことであった<sup>(20)</sup>。また、駐中米国公使ラインシュ(Paul S. Reinsch)は二月一六日、朝鮮革命党の代表が金仲文という名で中国の旅券をもって朝鮮独立を訴えるためにパリに向かった、と報告した。朝鮮革命党とはもちろん新韓青年党を指すが、彼らは、すでに一月に朝鮮の略史、朝鮮での日本の悪政、なぜ朝鮮が解放されるべきかの理由、独立達成までの計画を記した文書をラインシュに送付していた<sup>(21)</sup>。さらに、金奎植のパリ行きに便宜を図った広東政府の唐紹儀は既に一九一八年一月二二〇日、駐上海米国総領事サモンズ(Thomas Sammons)に対して、今度の講和会議で中国が最初に取り上げる問題は朝鮮独立かもしれないと語っており<sup>(22)</sup>、広東

政府の最高責任者孫文も二月一八日、朝鮮独立について日中間で合意がなされるべきである、とサモンズに話していた<sup>(23)</sup>。

金奎植は、インド洋を経て、三月一三日にパリに到着した。そして、彼は、パリ市リュ・ド・シャトダン(Rue de Chateaudun)三八に住む詩人宅を宿舍兼講和会議朝鮮代表団事務所とし、タイピストと通訳を雇って、「公報局(Bureau d'Information Coréen)」も設置した<sup>(24)</sup>。こうして、講和会議に対して働き掛けを行なう態勢が整ったが、金奎植は、自分一人ではこの大仕事をこなすのは困難であり、協力者が必要だと感じた。そこで、金奎植は三月一七日、一八八六年に宣教師として朝鮮にやってきて、教育活動に従事し、自ら雑誌『コリア・レビュー』を編集・発行する一方、日露戦争中の日本の対韓政策から反日に転じ、一九〇五年一二月の第二次日韓協約終結後に時の大統領T・ルーズベルト(Theodore Roosevelt)に宛てた(一八八二年締結の米朝修好通商条約第一条の周旋条項に基づいた)助力要請の高宗の親書伝達、一九〇七年のハーグ密使事件への援助なども行なったハルバート(Homer B. Hulbert)がすでにパリ

にきていたので、彼と合流した。そして、金奎植は、当時スイスのチューリヒ大学に在学中の李灌鎔に急ぎパリに来るよう打電し、卒業試験の準備で忙しかった李灌鎔は、それを放棄してパリ入りし、金奎植を補佐した<sup>25)</sup>。

この頃、米国では在米朝鮮人団体の大韓人国民会から李承晩(のち、現在の大韓民国の初代大統領)、鄭翰景の二人がパリに派遣されることになったが、二人は、パリ行きのための旅券が得られないため、米国から出国できずにいた<sup>26)</sup>。そこで、二人は、二月二五日付けで日本の韓国併合の不当性、日本の朝鮮統治の苛酷さを訴える一方、「：将来における完全な独立の保証のもと、朝鮮を国際連盟の委任統治下においていただくことを必死の思いでお願いいたします。：」との文言が入った請願書を準備した。そして、二人は、この「委任統治請願」を國務省あるいはホワイト・ハウスを通じてパリの米国講和代表団に伝達しようとしたが<sup>27)</sup>、米国代表団、とりわけランシングの「いまこの時点で朝鮮の代表が当地に来ることはきわめて不適当だ」との意向をうけて、國務省、ホワイト・ハウスは、ともに二人の意向に応じず、受けとった請願書を二人に返却した<sup>28)</sup>。こうしてパリ行きがならな

かった二人に加えて、金奎植の後に上海から派遣された金湯が五月初め、米軍志願兵としてヨーロッパに参戦し、ドイツにいた黄巴煥が六月三日、趙素昂がやはり六月、呂運亨の弟呂運弘が七月初め、そしてロシアでの朝鮮人団体大韓国民議会から二月に派遣されたもののロシア内で足留めに遭った尹海、高昌一が九月二六日にそれぞれパリに到着したが、到着が遅れた感は否定できない<sup>29)</sup>。そのため、パリでの働き掛けの成否は、金奎植の双肩にかかった。

金奎植はまず、一三ページからなる「解放のための朝鮮人の主張を捧呈するメモランダム」を作成したが、その内容は、一、日本は日清・日露戦争の際に朝鮮(韓国)の独立を保証してきたにもかかわらず、不法な方法で韓国を奪取した、二、歴史的にも、地理的にも、戦略的にも、朝鮮は独立国でなければならぬ、三、経済的にも、いま朝鮮を解放して中国にフリー・ハンドを与えなければ、日本が東アジア地域を席卷して、欧米諸国の事業は駆逐される、四、日本の韓国併合後、朝鮮人は日本の庄政下においてさまざまな形で呻吟しているので、人道的にみても朝鮮人は救済されてしかるべきである、

五、何よりも、全朝鮮人の意志は独立で統一している、となっていた。<sup>(30)</sup>そして、金奎植は四月五日、「朝鮮、満州、シベリア、米国その他の地域に定住する一八七〇万人の朝鮮人を代表する新韓青年党によって派遣された署名者は……」の書出しで始まり、前述のメモランダムを要約した朝鮮が独立すべき一二項目の理由を挙げた書簡をメモランダムとともに講和会議に送付した。<sup>(31)</sup>ただ、ここで見逃せないのは、朝鮮が独立すべき理由の最後の部分に「……日本が監督の一員ではないとの条件のもと、朝鮮は一定の試験期間のあいだ、自らを国際的監督に委ねることを望む。……」との文言があることだが、これは、李承晩らの「委任統治請願」とはほとんど差異がないと思われる。李承晩に対しては、一九一九年四月一日に上海で成立する「大韓民国臨時政府」の閣員選出のための臨時議政院の初会議がもたれた四月一日、有力な構成員の一人とみられた独立運動家で歴史家の申采浩が「国を取り戻す前に売った」と猛烈な非難を加えていた(それでも、李承晩は結局、國務総理に選出されたが、その後、反李承晩派は、李承晩への批判の際にこの委任統治問題を再三もち出した)。しかし、金奎植の場合は、前述の

文言が上海などにいる朝鮮人に明るみにならなかったせいか、あるいは金奎植が李承晩のように日頃から独断専行を行なって摩擦を引き起こすような人物ではなかったせいいか、李承晩の時とは違って問題にはされなかった。それでも、李承晩たちと同様、金奎植も現地の状況を見て前述のような文言を入れたことは十分に想像がつく。

金奎植は四月一日、米国で足留めされている李承晩がパリに行けるようウィルソン、ランシングに口添えしてほしいと國務省極東部の前部長ウィリアムズ(Edward T. Williams)に依頼した。<sup>(32)</sup>ウィリアムズは、駐米日本大使石井菊次郎が三月二一日に「朝鮮での騒擾は、何人かの朝鮮人学生の所業だ。……われわれ日本人は、朝鮮での治政に誇りをもっている。日本の監督下で朝鮮人は以前よりもうまく統治されるようになった。<sup>(33)</sup>……」と三・一運動について弁明したのに対して、「朝鮮が以前よりよく統治されているというのは事実かもしれないが、一つの重要な事実、つまりどんなによいものであるかもしれないにしても異民族により押しつけられた政府よりもどんなに悪いものであっても自らの政府のほうを人びとは選ぶということを石井子は忘れている」と

記し<sup>(34)</sup>、日本の姿勢には批判的だった。それでも、彼は、

日本の韓国併合はすでに米國も承認済みのものゆえ、朝鮮代表の訴えは受理されまいだろうとの感想をもらしており、こうした考えは、米國代表団書記官としてパリに来ており、後に一九三二年から九年後の日米開戦時まで駐日大使を務めることになるグルー (Joseph C. Grew)、國務省極東部の一員としてパリに来ており、一九三〇年代には対日強硬論でならずことになる中國問題の専門家ホーンベック (Stanley K. Hornbeck) などのあいだでも共通したものであった<sup>(35)</sup>。そして、金奎植の最初の働き掛けは、回答がなされることなく失敗に帰した。パリの日本代表團も金奎植の働き掛けを察知し、そのことを本國に報告した<sup>(36)</sup>。

最初の働き掛けが奏効しなかったことをうけて、金奎植は、最初の時よりも詳細な文書を用意して、幅広く働き掛けを行なう必要性を感じ、その準備に忙殺された。

そして、作成されたのが、「朝鮮國民および國家の主張―日本からの解放、そして朝鮮の獨立國としての再建のために―」という題名の「請願書」および「メモランダム」である。

「請願書」の概略は、

一、朝鮮國民は四二〇〇年間、獨立國としての歴史をもってきた。

二、朝鮮が主權國家であることは、日米英など各國が条約で承認してきた。

三、これら条約が朝鮮を獨立國として承認してきたのみならず、ある一國が朝鮮を単独で処理しえないとの基礎のもとで朝鮮の獨立を確立してきた。

四、日本は、詐欺・武力をもって併合条約を強要し、韓國の獨立を侵犯した。

五、こうした主權の侵犯に対して、朝鮮國民および國家は、絶えず抗議をし、現在もしている。

六、日本の統治手段の苛酷さから、こうした抗議はたえず更新・強化されている。

七、朝鮮の教育・思想は、日本が統制している。

八、朝鮮人の資産は、日本の統制下にある。

九、日本は、朝鮮でのキリスト教布教妨害のためにあらゆる手段を用いている。

一〇、日本が達成したと主張する朝鮮での「改革」は大部分、朝鮮人を犠牲にして日本人のためになされ

たものである。

- 一一、日本は、暴利獲得者として朝鮮を支配・統治している。
- 一二、朝鮮人にとってのみならず、英米仏の利益のためにも朝鮮の日本からの解放は緊要である。
- 一三、通商面からも、日本は、欧米を朝鮮から駆逐している。
- 一四、日本の絶えまない大陸への膨脹政策は、英米仏の利益と相衝突する。
- 一五、日本の大陸政策は、韓国から満州、中国へと絶えずその対象を移してきた。
- 一六、朝鮮国民の日本への抗議の姿勢は、三・一運動において実証された。
- 一七、朝鮮代表団は、朝鮮での運動の進展状況についての報告を多く受けている。
- 一八、大韓民国臨時政府が組織された。
- 一九、三・一運動は朝鮮全土に拡大しているが、決して過激なものとなっていないにもかかわらず、日本は、残酷な方法で鎮圧に臨んでいる。
- 二〇、朝鮮国民は、一九一〇年八月二二日の韓国併合

条約は無効であると宣言する。

というものであった。

そして、「メモランダム」で主張されている各項目(すべてで二三項目。あと、付録が(一)と(二)の題名を部分的に見ると、

- 二、国家としての四二〇〇年
  - 九、朝鮮人地主からの(土地の)没収
  - 一〇、朝鮮語、朝鮮史の禁止
  - 一一、朝鮮の教育「統制」
  - 一二、朝鮮の資産「統制」
  - 一三、朝鮮の台所用包丁(台所用包丁は、五〜六家族で一丁だけもつことが許可)
  - 一四、キリスト教に対する日本の敵意
  - 一五、「大要塞」としての朝鮮
  - 一九、日本の大陸政策
  - 二二、太平洋の制覇―世界征服政策
- 自分をバリに派遣した上海の新韓青年党、在米朝鮮人団体である大韓人国民会、そして大韓民国臨時政府の代表者として以上の「請願書」と「メモランダム」を作成

した金奎植は、五月中旬頃からこれらを提出して朝鮮の主張を少しでも講和会議に反映させようと米國代表団を中心に各方面への働き掛けを試みた。主要なものとその際の相手の対応をみたい。

金奎植が働き掛けの対象とした人物のうち最も重要と考えたひとりが、ハウスであった。金奎植は五月一三日、「請願書」と「メモランダム」を同封した書簡をハウスに送付し、これらの熟読を求めたが、駐仏米國大使館員フレーザー(Arthur H. Frazer)を通じてのハウスの二度の返答は、「請願書」および「メモランダム」の送付を感謝するというものにはすぎなかった。<sup>(39)</sup>そこで、正確な日時は不明であるが、金奎植は、ハウスとの直接的接触を試みた。しかし、一八九五年に駐朝公使館で勤務した経験をもち、ウィルソンとハウスの通訳官としてパリに来ていたボンサル(Stephen Bonsal)の講和会議の回想記によると、ハウスは、朝鮮の立場に同情的だったボンサルと見解を一にしていたが、「われわれは現実的でなければならぬ。もしわれわれがあまりに多くのことを試みるならば、何も達成できなくなるかもしれない」と語り、朝鮮問題が講和会議で取り上げられる見込

みはないことを金奎植に伝達するようボンサルに命じたのであった。それでも、ハウスは、ボンサルを通じて「ヨーロッパにおいて正義が確立されれば、それがほかの分野にも及ぶかもしれない。おそらく、國際連盟が後日、早急に処理すべき問題がそれほどない時に日本を抑制できるだろう」と語り、そのため、金奎植は、遠くない将来に國際連盟が朝鮮人の主張に少なくとも耳を傾けてくれることに期待をもち、パリを去る際にボンサルと会見した際にも(落胆しつつも)安堵の表情を示したのであった。<sup>(40)</sup>

金奎植は、朝鮮での日本の地位に理解を示し、李承晩たちの米國出国を認めなかったランシングに対しても働き掛けた。金奎植は五月一三日、「請願書」および「メモランダム」を同封した書簡をランシングに送付して熟読を求め、翌日、もう一度書簡を送付し、朝鮮人が未曾有の抑圧にさらされておられ、日本の鉄靴のもとで踏みつけにさらされているので人道・正義のため公平な判断を下してほしいと要請した。<sup>(41)</sup>ランシングは何の回答もなかったが、金奎植の書簡を直接手にしたランシングの秘書カーク(A. C. Kirk)の反応は違った。カークは、こ

の書簡をウィルソンにまで届け、朝鮮人の主張に対して短くてもよいから声明を出す必要があるとホーンベックに提案し、この書簡をウィルソンの秘書クローズ(Bert F. Close)に託したのであった。<sup>(43)</sup>それでも、ランシングとは一味違うカークのこの行動に対して、ホーンベックは、「…会議あるいは米国政府が朝鮮人の主張に耳を傾けることにおいて何かしうる可能性があるでしょうか。…」との書簡をカークに送付し、下手な行動はとるべきではないことを示唆し、<sup>(44)</sup>クローズも、自分に託された金奎植の書簡をウィルソンに届けることなく、グルーに回したのであった。<sup>(45)</sup>

そのほかにも、金奎植は五月二三日、講和委員のブリス將軍(General Tasker H. Bliss)および共和党系の元外交官ホワイト(Henry White)、<sup>(47)</sup>ウィリアムズなどにも「請願書」および「メモランダム」を同封した書簡を送付し、助力を要請したが、彼らは、いずれも書簡の送付を感謝する回答の書簡を金奎植に送付するに留まった。<sup>(49)</sup>

金奎植の働き掛けの対象は、米国代表团だけではなかった。彼は五月二二日、講和会議の議長役でもあった仏

首相クレマンソー(Georges Clemenceau)、<sup>(50)</sup>そして英  
国首相ロイド・ジョージ(David Lloyd George)に書簡を送付して、同封の「請願書」および「メモランダム」の熟読を要請し、日本の朝鮮支配が必ず英仏の利益を損ねることになると示唆したが、いずれも何の反応もなかった。

そして、金奎植が働き掛けの対象とした人物で落せないのが、肝心のウィルソンであった。金奎植は五月二二日、「請願書」および「メモランダム」を同封した書簡を送付し、クレマンソー、ロイド・ジョージの時と同様、「請願書」および「メモランダム」の熟読を要請して、日本の朝鮮支配・大陸政策が米国の利益侵害になりかねないと示唆した。<sup>(51)</sup>金奎植はウィルソンに宛てたこの書簡のコピーを前述の米国代表团の人たちに宛てた書簡にも同封していたが、ウィルソンがそれに直接回答することはなく、グルーが書簡の受理および謝意を記した回答の書簡を金奎植に送付するに留まった。<sup>(53)</sup>この時に限らず、ウィルソン文書などの個人文書および外交文書などを見るかぎり、ウィルソンが朝鮮人の自分への働き掛けに對して(内容はどうであれ)自分の考えをもって臨んだ形

跡はまったくみられないし、それどころか、三・一運動の勃発後も彼が朝鮮問題についてどのように考えているのかをハウス、ランシングをはじめ周囲の人たちに明らかにした形跡すらみられない。講和会議において処理しなければならぬ問題が山積していたウィルソンにとつてすでに日本の植民地となり国際的には「解決済み」だった朝鮮問題にまで頭をまわす余裕はなかったというところが背景にあるのは明白であるが、もう一つの背景として、朝鮮人の希望を満たすことは困難であり、もしそうしたならば今度は日本人の恨みを買いかねないというのが朝鮮問題の現状であると判断したウィルソンが周囲の人たちに自らの考えを明らかにしたり、ましてや朝鮮人の自分への働き掛けに反応することによって朝鮮問題がいっそう複雑なものとなることを嫌ったとも考えられる。

以上のような金奎植の活発な働き掛けを日本代表団が見逃すはずはなく、全権の一人で駐仏大使の松井慶四郎は五月一六日、このことを本国に報告したが、この報告は、外務省には届かなかつた。通信社の報道によってこの事実を知つた外相内田康哉は再報告を行なうよう松井に訓令し、<sup>(56)</sup> それを受けた松井は六月五日、金奎植が講和

会議に働き掛けをしたこと、それをうけて講和会議書記局が日本の意向を尋ねてきたので、朝鮮問題は日本の内政問題なので講和会議で取り上げるのは適当ではなく、金奎植の書面に回答する必要はないと答えたこと、書記局も日本の意向に沿うと約束したことなどを内田に報告した。<sup>(57)</sup>

以上からも明らかのように、金奎植の働き掛けに対する反応は、(心情的には朝鮮の立場に同情するものもあったとはいえ)概して厳しいものであった。それでも、金奎植は諦めずに六月一日、再度ウィルソンに書簡を送付し、助力を要請した。<sup>(58)</sup> その一方で、金奎植は六月一四日、ホーンベックに書簡を送付し、ウィルソン、ハウス、ランシングと非公式でよいから会見し、朝鮮の実情について説明したいので、そのための仲介の労をとってくれるよう要請した。<sup>(59)</sup> 金奎植はすでに五月一三日、プリスタちに送付したのと同じ書簡を彼に送付し、助力を要請していたが、再度なされたこの要請に対して、大戦の休戦以前から日本に対して厳しい見解をとっていたこともあり、ホーンベックは六月二五日、米国代表団に書簡を送付し、これまで朝鮮の実状について主張する場を与

えられなかった金奎植が非公式な形でよいから米国代表団の誰かと会見する機会を与えてほしいと要請してきていること、金奎植が提供してくれた資料、米国の在外公館による報告および新聞報道に目を通し、日本が朝鮮においてきわめて残虐かつ抑圧的な政策をとっていること、駐日英国大使館も三・一運動への日本の弾圧に対して抗議するよう英国政府に進言していること、日本は朝鮮在住米国人宣教師の仕事を妨害しているのみならず、彼らに暴行を加えているが、金奎植に会見の機会を与えることは米国当局が金奎植の努力および朝鮮における事態に無関心ではないと示すことになることを挙げて、可能ならば金奎植に会見の機会を与えるよう進言した<sup>(61)</sup>。それでも、ホーンベックの進言だけではどうにもならず、また彼の進言からわずか三日後の六月二十八日には連合国とドイツとのあいだでベルサイユ講和条約が調印され、結局非公式でもよいからウィルソン、ハウス、ランシングと会見したいとの金奎植の願いは実現することなく終わった。

金奎植のバリにおける活動は、米国代表団の一定の同情は得たものの、所期の目的達成には至らなかった。そ

こで、金奎植たちはベルサイユ条約調印直後の六月三日、米国代表団に朝鮮問題の報告を行ない、七月二十八日にはフランス東洋政治研究会で中朝両国問題演説会とフランス法民政治研究会で朝鮮問題報告会、七月三十一日にはフランス東洋政治研究会で朝鮮問題第二回演説会を開催した<sup>(62)</sup>。

さらに、ちょうどこの時期、スイスで社会主義インターナショナル大会が開催中であつたが、朝鮮代表団を代表して李灌鎔と趙素昂が八月六日から大会に出席し、大会は八月九日、

一 大会は、朝鮮独立問題を承認する

二 大会は、代表を選出し、東アジア情報を調査する

三 大会は、東西を連絡し、革命を促進する

という決議を採択した<sup>(63)</sup>。

こうしたことをうけて、金奎植は、ヨーロッパにおけるこれからの活動を李灌鎔、黄巴煥に託して、金湯、呂運弘を帯同して八月九日、バリから米国に向かった<sup>(64)</sup>。そして、金奎植は米国到着後の八月二十八日、李承晩と連名の独立宣言通知書とともに自治ではなく絶対独立を朝鮮は望んでいるとの書簡をランシングに送付したが、副大

統領マーシャル (Thomas R. Marshall) の秘書ジスル シュワイテ (Mark Thistlechwaite) は九月六日、金奎植が上院議長でもあるマーシャルにも書簡を送付し、その中で朝鮮問題を上院に上程するよう要請してきたが、マーシャルはその要請に応じるつもりはないと金奎植に伝えた、とランシングに知らせた。<sup>(66)</sup> さらに、呂運弘も九月一七日、ランシングに尽力してくれるよう要請したが、<sup>(67)</sup> 何の回答もなかった。こうして、パリから米国にかけて行なわれた金奎植たちの働き掛けは、所期の目的を果たせずじまいに終わったのである。

#### 四 おわりに

ベルサイユ講和会議をはじめとする一連の講和会議は、独、墺、オスマン・トルコなどの同盟国に対して戦勝国たる連合国が戦後の脅威除去および勢力拡大の思惑から過重とも思える自分たちの要求をつきつけるという性格をもっていた。そして、その一貫として、連合国は、海外におけるドイツの植民地の一切の剥奪、オーストリア・ハンガリーの解体とそこでのいくつかの被支配民族の独立などを実現させたが、とりわけ英仏伊には自らが同

様のことを行なう意向はなかった。また、英仏伊と日本はすでに大戦中、講和会議においてヨーロッパでの英仏伊各国の、そして極東での日本の主張に反対しないことを秘密の内に約束し合っていた。したがって、英仏伊が講和会議において当時大戦とは直接関係がないとみなされた朝鮮問題で日本の意向に反する措置をとることは考えられなかった。

一方、前述の秘密外交のようなものを大戦をもたらし「旧外交」ととらえ、それに代わる「新外交」の国際社会への導入が必要と感じていたのが、ほかならぬウィルソンであった。また、そのウィルソンが大統領に就任後、日米関係は、一九一五年の対中二一か条要求、一九一六年の米国での建艦法制定、一九一八年のシベリア出兵、米西海岸での日本人移民排斥などで摩擦の度を加えていた。それゆえ、朝鮮（パリにおいては金奎植）からすれば、究極の目標である独立のため日本を最も牽制しうる国である米国に重点的に働き掛けるのは自然であった。

しかし、米政府は、「新外交」確立のためには「五大国」である英米仏伊日の一定の協調を重視していたが、

このことは、ウィルソンがほかのどの問題よりも優先していた国際連盟の設立をめぐるとりわけいえた。それゆえ、米国は、講和会議において譲歩を余儀なくされたが、日本との関係においても、米国は、カリフォルニア州での反対など国内政治的配慮から「人種平等案」についての日本の主張を斥けただけに、ほかの問題に対してはより「現実主義的」に臨む必要に迫られた。したがって、一九〇五年の韓国保護国化、一九一〇年の韓国併合の際に異議をとらななかった米国からすれば、講和会議で金奎植の要請に応じて日本の反感を招くのは望ましくなかった。ただ、米国代表団の中にもホーンベックのように金奎植の要請には応じないという基本方針とは多少なりとも異なる対応にしようとした人もいたが、その場合も、朝鮮の現状に対する同情心、朝鮮で三・一運動が起きている一方で「人種平等案」の主張に固執する日本へのある種の反感などからのものであり、朝鮮の独立支持による日米関係の悪化を望んでのものではなかった。日本からすると、設立が必至の国際連盟に加入した際の不利益回避、在米日系人排斥への牽制のために「人種平等案」提案をしたのであるが、その最中に朝鮮で三・

一運動が起き、パリに金奎植が現われたのは、提案それ自体はもっともなものでもあった(だからこそ、採決に付されると多数の賛成を得、山東省問題で日本と対立していた中国も賛成票を投じた)だけにいっそう間の悪いものであった。しかし、朝鮮の地位そのものに変更を加える意向がまったく以上、日本がとれる途は、朝鮮における三・一運動の鎮圧、パリにおける「朝鮮問題」日本の国内問題」との主張および金奎植の請願無視の要請を講和会議に対して行なうほかになかった。

李承晩などが来れないという状況の中で世界各地の朝鮮人独立運動家たちの期待をうける形でパリで孤軍奮闘した金奎植であったが、その彼としても、講和会議における「現実主義」の壁にはねかえされ、米国代表団の一定の同情以上の具体的成果を得ることはできなかった。また、それを得るための一つの方法として金奎植が上海からパリに向かう際に手助けし、朝鮮問題のもつ意味もよく認識していた中国との協力が考えられるが、中国代表団自身がパリでは山東省問題で講和会議の「現実主義」に悩まされていた。そのような状況下、朝鮮問題にまで目を向ける余裕はなかったのか、管見のかぎりでは

講和会議において中国代表団と金奎植が協力して臨んだ形跡は見当たらない。そして、金奎植および中国代表団の働き掛けが前述のような結果に終わったことは、ベルサイユ講和会議および条約がどのような性格のものであったのかの一端を示すものであったといってもよいであらう。

朝鮮での三・一運動も結局のところ、鎮圧され、日本の朝鮮統治は、一九一九年九月に赴任した朝鮮総督齋藤実により「武断統治」から「文化政治」へとその衣を改めたもののそれ以後も続いた。朝鮮独立運動は、これ以降も行なわれるが、方法の違いから分化の様相を呈する。そのような中、米國に到着した金奎植は、一九二〇年一月三日に上海に向かうために米國を離れるまで独立運動を展開したが、うまくはいかなかった。そして、上海でも独立運動を展開していた金奎植は、海軍軍縮問題および極東・太平洋問題解決のために一九二一年一月月から翌年二月にかけて開かれたワシントン会議に対抗するためにコミンテルンがモスクワで一九二二年一月二日から二月二日にかけて開いた第一回極東労働者大会(The First Congress of the Toilers of the Far East)

に一九一九年には自分をパリに送った呂運亨とともに民族主義の立場を堅持しつつ朝鮮代表の一人として参加することになるのである。<sup>(6)</sup>

(1) 「呂運亨調査」(2)、一九二九年八月一日、金俊燁・金昌順編『韓国共産主義運動史』資料編Ⅰ(高麗大学校亜細亞問題研究所、一九八〇年)、二九二頁。姜徳相「上海時代の呂運亨」、『三千里』三八(一九八四年)、一三一—一三七頁。

(2) 「呂運亨調査」(2)、同右。姜徳相、同右、一三七—一四〇頁。

(3) 「呂運亨調査」(2)、同右、二九三頁。呂運弘「夢陽呂運亨」(ソウル青廈閣、一九六七年)、二四—二五頁。慎鏞廈『韓国近代民族運動史研究』(ソウル一潮閣、一九八八年)、一六九—一七〇頁。

(4) 「呂運亨調査」(2)、同右。慎鏞廈前掲書、一七一—一七三頁。なお、「呂運亨調査」(3)、一九三〇年六月二日、同右、四一八頁では、同党の名実とも組織化は、この年十一月の時期であるとなっている。

(5) 呂運弘前掲書、二五頁。

(6) クレインは朝鮮滞在中、いくつかのパーティに出席し、歓待をうけ、朝鮮の美と壮大さ、そして朝鮮人に深い感銘をうけたとする一方、「私は、朝鮮における日本の仮借なき、この洗練された人びとの魂を打ちこわすために日本

- 人があつたことをするのやり方について多くを耳にした。…」との感想を述べた。Memoirs of Charles R. Crane, pp. 211-212. Crane Papers (Columbia University, New York), Box 3.
- (7) Thomas Sammons to Robert Lansing, November 30, 1918, 032. C 85, Department of State Decimal File, 1910-29 (National Archives, Washington), RG 59, Box 0307.
- (8) Speech by Crane, November 28, 1918, 763. 72119/3978, *Records of the Department of State Relating to World War I and Its Termination, 1914-29, Microfilm* (National Archives, Washington), No. 367, Reel 395. [2] *WWI and Its Termination, 1914-29, Microfilm*, No. 367, R395. (4) (5) (6) (略記)
- (9) 「呂運亨調書」(2) 一九二九年八月五日、三三〇—三三二頁。呂運弘前掲書、二五—二六頁。一方、Memoirs of Crane, p. 219 では、以上のような経過についてはまったく述べられていない。
- (10) 李庭植『金奎植の生涯』(ソウル新丘文化社、一九七四年) 三九—五三、二二七—二二八頁。
- (11) 同右、五四頁。呂運弘前掲書、二七頁。
- (12) 李庭植前掲書、五五—五六頁。
- (13) 慎輔廈前掲書、一八六—一九五頁。姜徳相「上海時代の呂運亨」、一四五—一四六頁。
- (14) Ray Stannard Baker and William E. Dodd eds., *The Public Papers of Woodrow Wilson* (6 Vol., Harper & Brothers, New York, 1924-1927), Vol. 5, pp. 155-162.
- (15) 外務省編『日本外交文書』—巴里講和会議経過概要(外務省、一九七一年) 一九九—二〇八、三四三、四三三—四三六、六〇六—六二二、七七一—七七六頁。
- (16) 牧野伸顕『回顧録』(中央公論社、一九七八年) 一九五—二一〇頁。細谷千博「牧野伸顕とツェルサイユ会議—《一等国》日本の登場—」、『日本外交の座標』(中央公論社、一九七八年) 四—一七頁。池井優「パリ平和会議と人種差別撤廃問題」、『国際政治』三三(日本国際政治学会、一九六三年) 四四—五八頁。
- (17) Current Intelligence Division, *American Section, Weekly Review*, March 30, 1919, Henry White Papers (Library of Congress, Washington), Container 41.
- (18) "Imperial Japan is rapidly throwing off all disguises" in *New York American*, April 1, 1919.
- (19) Thomas F. Millard, "Japan, 'race equality' and the League of Nations", April 6, 1919, Robert Lansing Papers (Library of Congress, Washington), Container 42.
- (20) 一九一九年三月六日付外相内田康哉宛駐上海総領事有吉明電報「日本外務省記録」(外務省外交史料館) MT—4—3—2—1—7 『不逞團関係雑件 鮮人の部 在上海地方』—
- (21) Reinsch to Lansing, February 16, 1919, 895. 00/581.



*Wilson* (Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1987), Vol. 56, p. 187.

(25) American Commission to Negotiate Peace, "Confidential bulletins", No. 103, 184, 611/110, *American Commission to Negotiate Peace, 1918-31, Microfilm*, No. 820, R 285.

(26) The Statement by Hornbeck with a comment by Williams, March 25, 1919 and Grew to Hornbeck, March 28, 1919, 895, 00/8, *ibid.*, R 563 and Stanley K. Hornbeck Papers (Stanford University, Stanford, California), Box 329.

(26) 一九一九年四月二十四日付内田宛駐仏大使松井慶四郎電報「日本外務省記録」M T 一四一三一二二一五『不逞団関係雑件 鮮人ノ部 在欧米』三

(27) Korean Delegation, "The Claim of the Korean People and Nation; Petition" and "Memorandum", April, 1919, Tasker H. Bliss Papers (Library of Congress, Washington), Container 312.

(28) Kim to House, May 13, 1919, Edward M. House Papers (Yale University, New Haven, Connecticut), Box 66.

(29) Frazier to Kim, May 14 and June 4, 1919, *ibid.*

(30) Stephen Bonsai, *Suitors and Suppliers—The Little Nations at Versailles* (Prentice-Hall, Inc., New York, 1946), pp. 222-226. 44年 5月 13日 金奎植の電

触の時期を二月とし、金奎植がソリを去った時期を三月としてゐるが、これは明らかに事実とは異なる。

(41) Kim to Lansing, May 13, 1919, 895, 00/17 and May 14, 1919, FW 895, 00/17, *American Commission to Negotiate Peace, 1918-31, Microfilm*, No. 820, R 563. 44年 シンシントは一九一七年九月一〇日「私は、日本での人口

の圧力、工業的膨脹の必要は理解してあり、日本の朝鮮占拠・満州への浸透は主としてこの不可避の必要性のためである。信じこめ」と石井に語る一方、ヨーロッパに到着後の一九一八年暮れ、「民族自決」の定義の困難をきよむその影響力がもつ危険性について示唆してゐた。Lansing, *War Memoirs of Robert Lansing* (The Bobbs-Merrill Company, Indianapolis, 1935), p. 295. "Certain Phrases of the President Contain the Seeds of 'Trouble', December 20, 1918 and "Self-Determination and the Danger", December 30, 1918, Lansing Papers, Microfilm, Reel 1.

(42) Kirk to Hornbeck, May 27, 1919, 895, 00/17, *American Commission to Negotiate Peace, 1918-31, Microfilm*, No. 820, R 563.

(43) Kirk to Close, May 31, 1919, 895, 00/19, *ibid.*

(44) Hornbeck to Kirk, May 27, 1919, *ibid.*

(45) Close to Kirk, June 4, 1919, 895, 00/22, *ibid.*

(46) Kim to Bliss, May 13, 1919, Bliss Papers, Container 312.

(47) Kim to White, May 13, 1919, White Papers, Contain-

er 52.

- (97) Kim to Williams, May 13, 1919, 895. 00/22. *American Commission to Negotiate Peace, 1918-31, Microfilm*, No. 820, R 563.
- (97) Williams to Kim, May 14, 1919, 895. 00/16, *ibid.* Aide and Secretary of White to Kim, May 17, 1919, White Papers, Container 52.
- (98) Kim to Clemenceau, May 12, 1919, 895. 00/17. *American Commission to Negotiate Peace, 1918-31, Microfilm*, No. 820, R 563.
- (98) Kim to Lloyd George, May 12, 1919, *ibid.*
- (98) Kim to Wilson, May 12, 1919, Wilson Papers, Microfilm, Reel 405.
- (98) Grew to Kim, May 14, 1919, 895. 00/17A. *American Commission to Negotiate Peace, 1918-31, Microfilm*, No. 820, R 563.
- (98) 一九一九年五月三〇日付内田宛松井電報「日本外務省記録」MT-2-3-1-11『巴里平和會議 雜件』一
- (98) 一九一九年五月二七日付松井宛内田電報「同右。」
- (98) 一九一九年六月三日付松井宛内田電報「同右。」
- (98) 一九一九年六月五日付内田宛松井電報「同右。『日本外交文書』—巴里講和會議經過概要、九一〇頁。
- (98) Kim to Wilson, June 11, 1919, Wilson Papers, Microfilm, Reel 411.
- (98) Kim to Hornbeck, June 14, 1919, White Papers, Con-

tainer 52.

- (98) Kim to Hornbeck, May 13, 1919, Hornbeck Papers, Box 329.
- (98) Hornbeck to the American Commissioners, June 25, 1919, White Papers, Container 52.
- (98) 「欧州キリスト事業」五一七頁。洪淳鏡前掲文、二六八頁。
- (98) 『獨立新聞』一九一九年一〇月二八日第一面「萬國社會黨大會の韓國獨立承認」
- (98) 「欧州キリスト事業」五一七—一八頁。李庭植前掲書、六四頁。
- (98) Kim to Lansing, August 28, 1919, 895. 00/655, *Internal Affairs, Korea, 1910-29, Microfilm*, No. 426, R3.
- (98) Thielechwaite to Lansing, September 6, 1919, 895. 00/656, *ibid.*
- (98) W. H. Lyuh to Lansing, September 17, 1919, 895. 00/657, *ibid.*
- (98) 李庭植前掲書、六五—九一頁。なお、第一回極東労働者大会の議案『*The First Congress of the Toilers of the Far East* (The Communist International, Petrograd, 1922)』キリヒシの邦訳である『ロンドン編 高屋定國・辻野功訳『極東勤労者大会』(合同出版、一九七〇年)』を参照。

(上智大学助教)